

里の暮らしに残る物語—伝承とその現代的再生—

山形県内陸北部の山村、角川の里。今年は雪が降るのが早く、地区の最深部では既に 50 cm 近い積雪に見舞われた。住民は雪が降るまでにできるだけ片づけしてしまおうと農作業や越冬の準備に追われる。しかしひとたび雪が降ってしまえば忙しきから一転。ゆったりと雪に閉じられた暮らしをお茶飲みや昔語りなどをして過ごすというのが常だ。

そんな雪が降る直前の忙しい時期、筆者がその活動にかかわっている住民のふるさとづくり教育団体「角川里の自然環境学校」で「地元学」が行われた。以前も触れたが地元学とは「ヨソモン（外部者）」と地元住民が共に集落を巡り、集落の地域資源を前にしながら、住民から学び、学んだことを地域づくり実践に生かしていくという手法だ。この活動は住民だけでは気づきにくい地域の日常の隠れた資源をヨソモンの目線の違いを活用して再発見し、具体的な地域づくり活動へ結びつけることが期待できる。筆者は角川の里で 7 年間この「地元学」に取り組んでいる。行うたびに新たな発見・再発見があり、里の自然や文化そこでの人々の営みがいかに奥深いものであるか痛感するのである。里の地域資源のそれぞれに地域の人が深くかかわった「成り立ちの物語」ともいべきものが生きた感覚で存在することが確認できるのである。今回行った地元学で見つけたことを次にいくつか触れてみよう。

この時期、集落を歩くと立派に実がなった柿の木が各所にみられる。とりわけ沢内という集落ではほとんどすべての家に柿の木ある。地元のおじいちゃんは次のように話す。「もともこの柿は角川にはなかったんだ。でも良いものだということで隣の庄内地方からわざわざ持ってきて植えた。当時のことだから結構大変だったはずだ。でも子どもが生まれると必ずと言ってよいほど植えたもんだ。子どもが大きくなったら食べられるように、自分の家で植えなかったことで他の家の子どもが盗んで食べないようにって、みんなこぞって植えたんだな。それでこんなに柿の木があるんだ。」今はそれらの柿もあまり食べられることもなく落ちて腐れるにまかせている。

小屋の中を見させてもらおうと立派なロープが目についた。聞くと買ったものではなく稲藁で自分たちで作ったものだという。地元のおじいちゃんは次のように答えた。「昔は正月に集落住民が集まって『つなない』という行事をしたもんだ。当時は茅葺屋根だったし川に架かる橋も『おさばし』といって木で組まれた手作りの橋だったから、そうしたものに綱は使われていたんだな。今はそんなこともなくなったのでしなくなった。こうして昔作った綱だけが使われることもなく残っているんだ。」

里山に入ってみると、間伐が必要な杉林が目についた。また今は使われなくなって荒れた山道も目についた。「山仕事が盛んだった頃の昔の山道がたくさんある。ちょっと手直しすればまだ使えるようになるんだけどな。そうすれば山菜やキノコを採りに行きやすくなるし山も荒れずにすむのだが」と住民は話す。

地元学では、様々な地域の物語が再発見され、再認識される。そしてそこから新たな再

生の芽が生まれる。今回の地元学でも地元のおじいちゃんと県内外の参加者による新たなプログラムが生まれることとなった。それは間伐や山道を補修する里山整備活動と伝統行事「つなない」を行おうというもの。活動で産出される杉材や綱を使って昔ながらの「おさばし」を散策道の必要なところに向け、子ども達の里山散策会を開催し、柿もぎをしようというものだ。これらの技術指導者は調査にかかわってくれたおじいちゃんおばあちゃんたちだ。使われなくなった里の地域資源の成り立ちの物語を受け継ぎ、新たな形で次世代に活かしていこうとする里づくりプログラムが生み出されていく一例である。